研究

私の姓氏考 (二)

郷土史に見る「泥谷姓」について

会員 泥谷捨夫

泥谷姓が堅田の泥谷地区で発生したと仮定推理すれば、大分市戸次所の泥谷姓は、佐伯氏七代惟仲の時、(北朝)暦応四年(一三四一)戸次豊前太郎瀬崎、佐伯庄家職となるとあり、この者の家臣に泥谷姓があり　帰国の折連れ帰ったのが帰農土着し、その子孫がふえたものと思われます。

高知県幡多郡の泥谷姓は、文禄二年(一五九三)佐伯氏十四代惟定が、大友氏(義統)の失脚につれ、佐伯氏も衰退、伊予藤堂家に身を寄せ、一族は四散して各地に住み、惟定の二男惟滋は土佐に住み、佐伯を紙水と称えたと伝えられているので、この家臣の泥谷姓がこれまた土着した、その子孫と思われます。

更に飛躍して推理すれば、愛知県碧海郡の泥谷姓は、元和四年(一六一八)佐伯惟定が各地転々の末、伊勢の津で病死したので、家臣の泥谷姓が隣国濃尾平野に走り土着して、今日に及んだのではないでしょうか。

宮崎県高鍋町にある泥谷姓は、筆者今春この地へ行き、七十才位の古老に聞いた話では、昔高鍋の殿様に、鶯谷・宿谷・松谷・泥谷の谷のつく家老があり、その子孫だというが、何時頃の何という大名か知らぬし、何か建造物か古文書でもあるかと聞いても知らぬし、先祖よりの言い伝えで、武士の子孫――の一点ばりで、日向には日知也城もあったし、外にもひじや姓はあるかも知れぬでしょう――とまことに頼りない返答で、佐伯泥谷姓とは関係なさそうに思いました。

身近な、大分県での姓の始めは、景行天皇の御代、豊の国を治めていた菟名手が、豊前国仲津郡中臣村に宿泊したが、翌朝、北方より飛来した白鳥が餅となり、しばらくして芋草数千許株(里芋)に変わり、その至徳の瑞の化生　芋は、まだ見たこともない立派なものでした。菟名手は朝廷に参上、状を奏聞しました。天皇は歓喜んで「汝の治める国を豊国と謂うべし」といわれ、重ねて姓を賜わり、豊国直と名乗ったと伝えられます。

姓は通常(かばね)と読みますが、苗字氏(うじ)一門一族(やから)をあらわすもの故、姓(かばねな)というべきもの(日本古典文学大系)とあり、もともと豪族の身分を表わす称号であったが、平安時代には官職名を冠し、時代が下がるにつれて、土地名を取入れたり、朝廷や将軍・大名等の賜姓を名乗り、また創姓も盛んで、江戸時代には上記の外に、長年庄屋等勤め功績のあった者や、大名に多額の献金をした者等に、苗字・帯刀を許すなどがあり、姓を名乗る者が多くなりました。

江戸時代には、武士や神官は姓名を名乗ることを許されたが、農・工・商即ち百姓町人は姓は許されず、商人は屋号を、職人は職業を名の上に冠して、相模屋吉兵衛、紀の国屋文左衛門、畳屋文吉等の様でありました。

しかし祖先が武士だったものは、百姓町人でも私姓といって密かに姓を名乗り、建造物や棟札、神社寺院等の寄進帳など後世に残るものには、堂々と姓名が記されています。

大永年間泥谷姓三名が床木に帰農してから約百年後の

元和九年（一六二三）建立の、永木椿ノ木ノ木部落にある地蔵塔（下図・依伯史談第四十号「藤田顧問調査発表」）の願主名には、市瀬次郎右衛門、御手洗勝右衛門、河野三右衛門、同姓もう二人、泥谷市右衛門、矢野又右衛門の七名には姓があり、外二十余名は、市介、与吉、助七等と、名前だけが記入されています。

寛延三年（一七五〇）造立の、大坂本部落金馬橋上流五十㍍、床木川の左岸（上流に向っての）堤防上にある蝗供養塔、くわしくは「蝗衆霊供養塔」（依伯史談八号紹介）。願主市瀬源六、市瀬兵兵衛、田賀志弥左エ門、市瀬寧左エ門と、百姓でありながら姓名が記入されています。

安永八年（一七七九）建立の庚申塔が、筆者の旧屋敷がありますが、それには「泥谷喜左エ門建之」と刻んであり、また「元禄十亥年」の古墓もあるが、及かげ石で風化がひどく判読しにくいが、姓名を記入した形跡がはっきりあり、百姓でも姓名を名乗って居たことが、上記二三の例で証明されます。

前号をお読みになった直川村の会員泥谷喜久司氏（同村上直見字竹ノ下）から、天和二戌年（一六八二）の「泥谷与左エ門」の墓があるとの連絡がありましたので、早速竹ノ下に泥谷氏をたずねて、案内してもらいました。なる程ど古い墓で夫婦の墓らしく並んでいて、姓名を確認して来ました。

明治三年（一八七〇）明治新政府によって戸籍法が発令され、同五年壬申、あの悪名高い壬申戸籍が作られ、公卿・大名は華族、武士は士族、下級武士は卒族、農・工・商は平民、賤民は其の他族ときめられ、後に卒族は士族、其の他の族（これには二種あるが省略）は平民と改められました。

この時から、国民全員が姓名を名乗るようになり、以前から私姓のあった者は喜んでこれを名乗り、無かった者は親類が河野だから河野にしよう、隣が山下だ自分も山下にしよう。近くに小川があるから小川にしよう。いや自分は谷川が良い谷川にしようと、好き女姓をつけ、古老の話では、役場書記氏や村の長老につけて貰ったものも多かったそうです。

中には急ぎ作った自分の姓を忘れ、私方の姓は何だったでしょうかと、戸籍係に聞きに行き、笑われた者も実際あった由です。

従って現在同姓だから同一祖先の子孫ときめることは出来ませんし、明治維新前の、建造物や記録にない姓は、戸籍簿作製の時作られた姓とされても、反ぱくする方法はないと思います。

さて泥谷姓ですが、読んで字の如くドロタニ、ドロ水の谷で、どういき目に見ても良い姓とは思えず、私姓として名乗っていた者以外、進んでつけた者はなかったと思います。

全国に二百万人は居ると言われる、鈴木・吉田等の姓は、昔から私姓として称えていた者の外、良い姓だからと、進んでつけた者も沢山あったと察しられ、源・平・藤橘に、一字加えたり、字を替えた姓も沢山あると伝えられています。

土方をひじかた、日出をひじと読み、土屋・土谷・土居など、少しは泥谷に近い姓もあり、谷の字のつく姓は枚挙に暇ない程あるし、泥谷姓の研究は、今のところ私は、尚将来の宿題としても、会員皆さんのご意見や、資料のご提供を期待しつつ、一応筆をおくことにいたします。（終）

（筆者住所＝南海部郡弥生町大字井崎水ノ瀬）